

表題	イチゴ省力地床育苗装置	機関	農業研究センター 農産園芸研究所
概要： <u>イチゴの育苗はベンチ式により、少ない床土量で育苗が可能で省力・軽作業化が可能となる。</u>			

研究のねらい

イチゴは価格が高く、安定している品目であるが、本県のイチゴの栽培面積は、ここ数年間はほぼ横這いで推移している。

面積が増加しない理由として、長い労働時間、作業姿勢の悪さなどがあげられる。特にイチゴの育苗についてはポット育苗が中心であり、作業姿勢が悪く、また、床土を大量に確保する必要があり、育苗期間も約4ヶ月に及び多くの労力を要している。

このため、ポット育苗が普及する前の育苗法であった地床育苗を高設化した省力地床育苗装置（省力ベンチ）を開発し、育苗の省力化・軽作業化を図る。

研究の成果

1. 装置の素材は高強度プラスチックで、極めて耐久性が高い。長さ2m、幅1.2m、高さ80cmの架台上で、1株毎に格子状に仕切り、底面部では仕切板と底部のネットの間に隙間を設けることにより、床土は連結している。底面部はネットを敷き、透水性は良好である。
2. 1株当たり容積は320mlで、1台当たり375株の育苗ができる。したがって10a当たりの必要台数は20～22台である。
3. 省力ベンチ苗は小苗での定植となるが、12月ではポット苗以上のクラウン径になる。
4. 省力ベンチ苗は年内収量はやや低いが、総収量はポット苗と同等の収量を示す。

普及上の留意点

1. 省力ベンチでは肥料が切れやすいので、ポット育苗よりも多めの施肥を行う。また、ベンチ苗はクラウン径8mm程度の小苗で定植するため、容易に花芽分化しやすいので、極端な窒素中断は行わない。
2. 採苗は6月上旬以降とする。あまり早くから採苗すると床土量が少ないため、9月以降に褐変根となり、老化苗になりやすい。
3. 育苗期のかん水量はポットよりやや少なくする。
4. 定植の葉数は4枚程度とし、根は白色根が多く形成されていなければならない。また、小苗での定植となるので、基肥は一部速効性の肥料を用い、初期生育を促す。

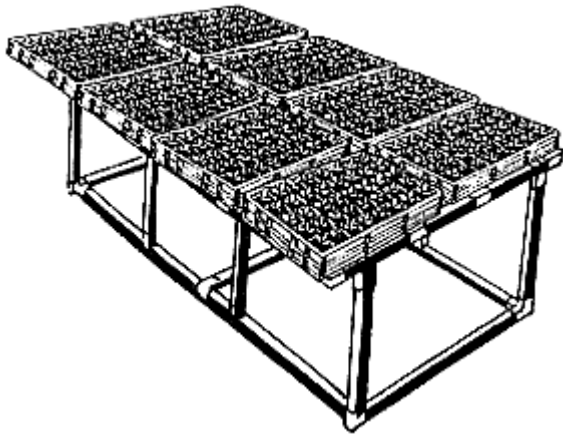


図1 イチゴ省力地床育苗装置全景

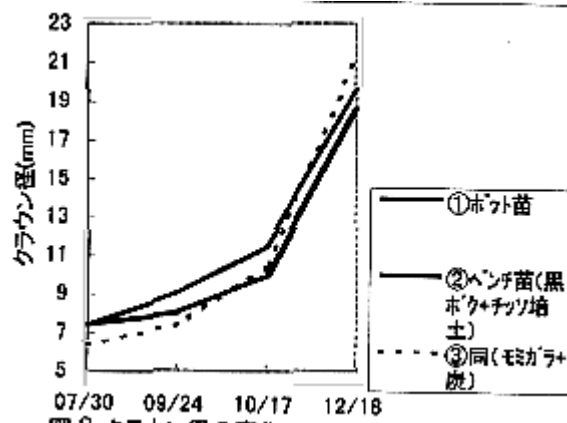


図2 クラウン径の変化

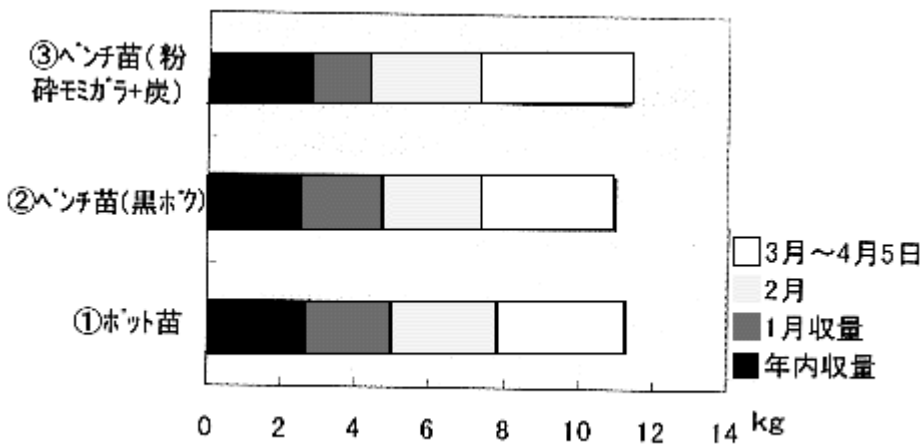


図3 収量比較(30株当たり)
図3 イチゴの収量比較(30株あたり)

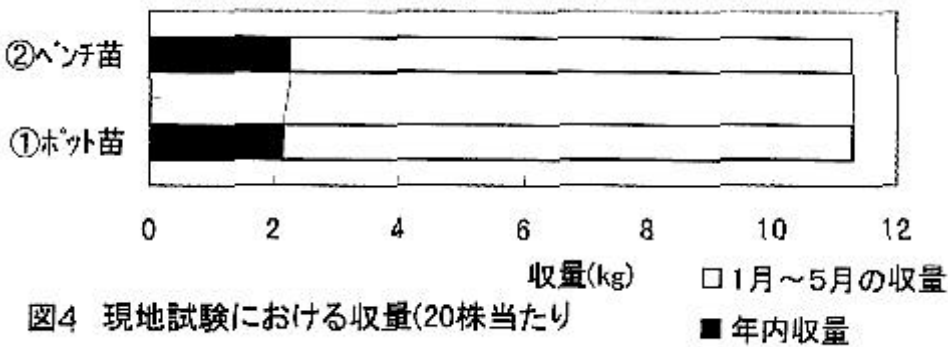


図4 現地試験における収量(20株当たり)

図4 現地試験における収量(20株あたり)